

# 一瞬の浄土

昨年秋、真宗大谷派金沢教務所のお招きで四回連続の宗教入門講座を担当した。二回目が終わったあとのことだ。最前列にすわっていた女性が「朝早くに起きたら、こんなものが書きました」といって、半分に切った原稿用紙を持ってこられた。

句読点を補ったほかは、そのままの形で紹介させていただく。

「私の浄土方便」

林ちい子、七十八歳。

人間、生きるには心奥、善悪・損得・健康・分別心がなくては生きてゆかれない現実がある。が、

菅原伸郎

善財

南無

この固まりしか知らなかったら必ず苦しむ。生は死なり、有は無なり。これを超える。今一瞬は久遠なり。一呼吸が兆億万の御先祖様と一緒に自覚する一瞬が浄土である。仰ぐ青空。雲一つない。澄み渡っている。黒雲あり、白雲あり、黄雲あり、紅雲あり、消える。あるは青空。私の浄土。

平成十七年十月二十二日午前六時半。

一読して、ただならない気配を感じた。その夜は遅かったのでお預かりだけして、三回目の講義が始まる前に改めてお話をうかがった。富山県で生まれ、金沢市に暮らす林さんは若いときから大変な苦勞を重ね、四人の子どもを育てた。そのかたわらで親鸞の教えを聞いて歩き、妙好人・浅原才市のように思い浮かんだ言葉を書きとめてきた。

最終回の夜、みなさんの前で私の解説を試みた。筆者はまず、自身の経験から「生きていくには、心の奥に善悪や損得や健康についての常識がどうしても必要」と考える。もちろん、その通りだろう。しかし、それに凝り固まってもいかは行き詰まる。兼好法師は『徒然草』七十五段でこういつていた。

兼好法師は『徒然草』七十五段でこういつていた。

《世にしたがへば、心、外の塵に奪はれて惑ひやすく、人に交はれば、言葉、よその聞きに随ひて、さながら心あらず。人に戯れ、物に争ひ、一度は恨み、一度は喜ぶ。そのこと定まれる事なし。分別みだりに起りて、得失やむ時なし》

林さんの散文詩はさらに「生は死なり、有は無なり。これを超える」と言い切る。仏教の根本思想である「不二」や「二即多」、あるいは西田哲学の「矛盾的自己同一」と同じ意味なのだろう。源信の『往生要集』第四ではこうなっている。

《一切の諸法は、本よりこのかた寂静なり。有にあらず無にあらず、常にあらず断にあらず、生ぜず滅せず、垢れず浄からず。一色・一香も

中道にあらずといふことなし。生死即涅槃・煩惱即菩提なり》

そして、林さんは「今一瞬は久遠なり。一呼吸が兆億方の御先祖様と一緒に自覚する一瞬が浄土である」と続けていく。「御先祖様」といっても、墓の周りに出没する亡霊などではない。「兆億万」の、いわば無量寿の世界であり、久遠の仏といってもいい。ギリシャ語では「カイロス」であり、「永遠の今」という言葉もある。キリスト教神秘主義の思

想家エックハルトはこう書いた。

《ここには以前も以後もなく、一切が現在である。そしてこの現なる直観において、わたしは一切の事物をわたしの所有となすのである。これが「時が満ちる」という意味である》(岩波文庫『エックハルト説教集』、田島照久編訳)

林さんにとって、浄土は決して死後の世界ではない。いまの一瞬、現世でこそ感じる実在なのだ。人生には黒雲も白雲も黄雲も紅雲もやってくるが、そうした恐怖や迷いはすべて消え去り、澄み渡った青空が広がっていく。つまりは「南無、無量寿仏」という感動なのだった。

(すがわらのおお)

東京医療保健大学教授)

